

特許協力条約

発信人 日本国特許庁（国際予備審査機関）

代理人
鈴木 崇生

様

あて名
〒532-0011
日本国大阪府大阪市淀川区西中島7丁目1-20
第1スエヒロビル



PCT

国際予備審査機関の見解書
(法第13条)
[PCT規則66]

発送日
(日.月.年) 02. 8. 2005

出願人又は代理人 の審査記号 PCT0404TR	応答期間 上記発送日から 2 月以内	
国際出願番号 PCT/JP2004/008044	国際出願日 (日.月.年) 09. 06. 2004	優先日 (日.月.年) 20. 06. 2003
国際特許分類 (IPC) Int.Cl? C08G18/00 // (C08G18/00, 101:00)		
出願人 (氏名又は名称) 東洋ゴム工業株式会社		

1. 国際調査機関の作成した見解書は、国際予備審査機関の見解書と みなされる。
 みなされない。

2. この 2 回目の見解書は、次の内容を含む。

第I欄 見解の基礎
 第II欄 優先権
 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成
 第IV欄 発明の單一性の欠如
 第V欄 法第13条 (PCT規則66.2(a)(ii)) に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明
 第VI欄 ある種の引用文献
 第VII欄 国際出願の不備
 第VIII欄 国際出願に対する意見

3. 出願人は、この見解書に応答することが求められる。
 いつ? 上記応答期間を参照すること。この応答期間に間に合わないときは、出願人は、法第13条 (PCT規則66.2(e)) に規定するとおり、その期間の経過前に国際予備審査機関に期間延長を請求することができる。ただし、期間延長が認められるのは合理的な理由があり、かつスケジュールに余裕がある場合に限られることに注意されたい。
 どのように? 法第13条 (PCT規則66.3) の規定に従い、答弁書及び必要な場合には、補正書を提出する。補正書の様式及び言語については、法施行規則第62条 (PCT規則66.8及び66.9) を参照すること。
 なお 補正書を提出する追加の機会については、法施行規則第61条の2 (PCT規則66.4) を参照すること。
 補正書及び/又は答弁書の審査官による考慮については、PCT規則66.4の2を参照すること。審査官との非公式の連絡については、PCT規則66.6を参照すること。
 応答がないときは、国際予備審査報告は、この見解書に基づき作成される。

4. 特許性に関する国際予備報告 (特許協力条約第2章) 作成の最終期限は、
 PCT規則69.2の規定により 12. 11. 2005 である。

名称及びあて先 日本国特許庁 (IPEA/JP) 郵便番号 100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号	特許庁審査官 (権限のある職員) 吉宗 亜弓 電話番号 03-3581-1101 内線 3457	4 J 3130
---	--	----------



第I欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

この見解書は、_____語による翻訳文を基礎とした。
 それは、次の目的で提出された翻訳文の言語である。
 PCT規則12.3及び23.1(b)にいう国際調査
 PCT規則12.4にいう国際公開
 PCT規則55.2又は55.3にいう国際予備審査

2. この見解書は下記の出願書類に基づいて作成された。(法第6条(PCT14条)の規定に基づく命令に応答するため
 に提出された差替え用紙は、この見解書において「出願時」とする。)

出願時の国際出願書類

明細書

第 1-14 ページ、出願時に提出されたもの
 第 _____ ページ、 _____ 付けで国際予備審査機関が受理したもの
 第 _____ ページ、 _____ 付けで国際予備審査機関が受理したもの

請求の範囲

第 1, 2 項、出願時に提出されたもの
 第 _____ 項、PCT19条の規定に基づき補正されたもの
 第 3-6 項、20.04.2005 付けで国際予備審査機関が受理したもの
 第 _____ 項、 _____ 付けで国際予備審査機関が受理したもの

図面

第 1 ページ/図、出願時に提出されたもの
 第 _____ ページ/図、 _____ 付けで国際予備審査機関が受理したもの
 第 _____ ページ/図、 _____ 付けで国際予備審査機関が受理したもの

配列表又は関連するテーブル

配列表に関する補充欄を参照すること。

3. 補正により、下記の書類が削除された。

明細書 第 _____ ページ
 請求の範囲 第 _____ 項
 図面 第 _____ ページ/図
 配列表 (具体的に記載すること) _____
 配列表に関するテーブル (具体的に記載すること) _____

4. この見解書は、補充欄に示したように、補正が出願時における開示の範囲を超えてされたものと認められるので、
 その補正がされなかったものとして作成した。(PCT規則70.2(c))

明細書 第 _____ ページ
 請求の範囲 第 _____ 項
 図面 第 _____ ページ/図
 配列表 (具体的に記載すること) _____
 配列表に関するテーブル (具体的に記載すること) _____

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての法第13条（PCT規則66.2(a)(ii)）に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲	有
	請求の範囲	無
進歩性 (I S)	請求の範囲	有
	請求の範囲	無
産業上の利用可能性 (I A)	請求の範囲	有
	請求の範囲	無

2. 文献及び説明

文献1：EP 1304349 A1 (Central Glass Company) 2003.04.23

文献2：JP 10-139697 A (旭硝子株式会社) 1998.05.26

文献3：JP 2002-516369 A (ゾルファイ フルオル ウント デリゲーテ ゲゼルシャフト ミット ベシュレンクテル ハフツング)

(1) 本願出願人は、2005年4月20日付け答弁書において、本願発明はHFC-365mfcを特定量含有するのに対し、文献1、2に記載の発明は、HFC-365mfcを含有しない点で、両発明が相違する旨主張する。

しかしながら、本願明細書の[0012]及び[表2]には、本願発明がHFC-365mfcを含有しない場合も包含する旨記載されているので、請求の範囲1-6に係る発明は、HFC-365mfcを含まないものも包含するものと認める。

そうすると、請求の範囲1、2に係る発明のうち、HFC-365mfcを含有しないものは、2004年7月26日付け見解書に示したとおり、文献1及び2に記載されているので、新規性及び進歩性を有さない。

また、文献1、2には、ポリオール化合物が第3級アミノ基含有ポリオール化合物、脂肪族ポリオール、及び芳香族ポリオールであることが記載されているので、請求の範囲3-6に係る発明のうち、HFC-365mfcを含有しないものは、上記と同様に、新規性及び進歩性を有さない。

(2) 文献1には、HFC-365mfcを含有することは示唆されるものの、その含有量が請求の範囲1-6に係る範囲であることが記載されていない。

しかしながら、文献3には、硬質ポリウレタンフォーム用発泡剤において、HFC-365mfcを50重量%未満に対し、HFC-245faを50重量%以上配合することが記載されている（請求項16）ので、文献1に記載の硬質ポリウレタンフォームにおいても、文献3に記載される程度の量でHFC-365mfcを配合することは、当業者が適宜なし得ることである。

また、それによる効果について検討するに、本願出願人は上記答弁書において、HFC-365mfcを特定量添加することによって、引火点の低下等を防止し、相溶化剤添加による効果を満足しつつフォームの物理特性低下を抑制できる旨主張する。

補充欄

いずれかの欄の大きさが足りない場合

第 V 欄の続き

しかしながら、これらの効果は、当業者が当然予測し得るものであって、顕著なものであるとは認められない。

したがって、請求の範囲1-6に係る発明のうち、HFC-365mfcを特定量含有するものは、新規性を有するものの、文献1及び3の記載から、進歩性を有さない。

(3) 文献2には、HFC-365mfcを特定量含有することが記載されていない。

しかしながら、上記(2)と同様に、文献2に記載の硬質ポリウレタンフォームにおいて、文献3に記載される程度の量でHFC-365mfcを配合することは、当業者が適宜なし得ることである。

したがって、請求の範囲1-6に係る発明のうち、HFC-365mfcを特定量含有するものは、新規性を有するものの、文献2及び3の記載から、進歩性を有さない。

第VI欄 ある種の引用文献

1. ある種の公表された文書(PCT規則70.10)

出願番号 特許番号	公知日 (日.月.年)	出願日 (日.月.年)	優先日 (有効な優先権の主張) (日.月.年)
JP 2004-83847 A 「EX」	18.03.2004	16.04.2003	28.06.2002
JP 2004-99862 A 「EX」	02.04.2004	15.11.2002	16.07.2002
JP 2004-176058 A 「EX」	24.06.2004	11.11.2003	11.11.2002

2. 書面による開示以外の開示 (PCT規則70.9)

書面による開示以外の開示の種類	書面による開示以外の開示の日付 (日.月.年)	書面による開示以外の開示に言及している 書面の日付 (日.月.年)

第VII欄 国際出願に対する意見

請求の範囲、明細書及び図面の明瞭性又は請求の範囲の明細書による十分な裏付についての意見を次に示す。

(1) 請求の範囲 1 には、「1, 1, 1, 3, 3-ペンタフルオロブタン (HFC-365mfc) を含有し、」と記載されていることから、請求の範囲 1-6 に係るポリオール組成物は、発泡剤として HFC-365mfc を必須成分として含有するものと認められるところ、明細書[0012]には、「HFC-365mfc は使用しなくてもよい。」と記載され、[表 2]には、HFC-365mfc を含有しない例が「実施例」として記載されており、矛盾している。

してみると、請求の範囲 1-6 に記載のポリオール組成物において、HFC-365mfc は、必須成分、任意成分のいずれであるのか不明確である。

(2) 明細書[表 3]に記載の「比較例 4」は、「比較例 3」の誤記と認められる。

注 意

提出書類の様式及び作成要領について

答弁書及び手続補正書は、特許協力条約に基づく国際出願等に関する法律施行規則第62条（様式第23）及び同規則第31条（様式第15）に従って作成して下さい。

（備考）

- 用紙は、日本工業規格A4形（横21cm、縦29.7cm）の大きさとし、可読性のある、丈夫な、白色の、滑らかな、光沢のない、耐久性のあるものを底紙にして、折らずに片面のみを用い、用紙には、不要な文字、記号、枠線、けい設等を記載してはならない。
- 用紙には、しわ及び抜け目があつてはならない。
- 余白は、少なくとも用紙の上端、右端及び下端におおのの2cm並びに左端に2.5cmをとるものとし、原則としてその上端及び左端についてはおおのの4cm並びにその右端及び下端についてはおおのの4cmを越えないものとする。この場合において、余白は、完全な空白としておくこととする。ただし、上端の余白の左端であって上端から1.5cm以内に書類記号（願書に記載されている場合に限る。）を付すことができる。
- 答弁書は、タイプ印又は印刷によるものとし、写真、静電的方法、写真オフセット及びマイクロフィルムによって直接に任意の部類の複製をすることができるよう作成する。
- 答弁書のすべてに用紙には、アラビア数字により1から始まる連続番号を用紙（余白部分を除く。）の上端又は下端の中央に付す。
- タイプ印又は印刷による場合において、行の間隔は、少なくとも5mm以上をとる。ただし、備考1.1、1.4においてローマ字を用いるときは1.5mm以上の幅をとる。
- 記載事項は、4号字の大きさの文字（備考1.1、1.4においてローマ字を用いるときは、大文字の大きさが縦0.21cm以上の文字）により、かつ、暗色の追色性のない色であって備考4に定める要件を満たすもので記載する。
- 「国際出願の表示」の欄には、既に特許庁から国際出願番号の通知を受けている場合には、その番号を「PCT/J P O O O O / O O O O O O O 」のように記載し、国際出願番号の通知を受ける前の場合は、その国際出願の提出日を日月年の順に「O O . O O . O O O O 提出の国際出願」のように記載するとともに、書類番号（願書に記載されている場合に限る。）を併せて記載する。
- 「氏名（名稱）」は、自然人においては姓及び名を姓、名の順に記載し、また、法人においてはその名称を記載する。
- 「あて名」は、「日本国、何県、何郡、何村、大字何、字何、何番地、何号」のように詳しく記載するとともに、郵便番号を記載する。
- 氏名若しくは名称又はあて名には、これらの音訳又は英語への翻訳をローマ字を用いて併記する。
- 「国籍」は、出願人又は代表者がその国民である国の国名を記載する。
- 「住所」は、出願人又は代表者がその居住者である国の国名を記載する。
- 「国名を記載する場合においては、特許庁長官が指定する国の名称を日本語及び英語により表示する。
- 「代理人」の欄には、その氏名の記載に合わせて、その氏名の前に「弁護士」、「弁理士」又は「法定代理人」のうち該当するものを記載する。
- 代理人によるときは本人の印は不要とし、代理人によらないときは「代理人」の欄を設けるには及ばない。
- 各用紙においては、原則として抹消、訂正、重ね書き及び行間押印を行ってはならない。
- 答弁書の用紙は、容易に分離し、又はとじ直すことができるよう例えばクリップ等を用いてじてじる。
- 「あて名」は出願人、代表者、代理人又は復代理人各人に1つあて名のみを記載する。
- 「復代理人」の欄には、その氏名の記載に合わせて、その氏名の前に「弁護士」又は「弁理士」のうち該当するものを記載する。
- 復代理人によるときは代理人の印は不要とし、復代理人によらないときは「復代理人」の欄を設けるには及ばない。
- 日付は、西暦紀元及びグレゴリー暦により、日についての数字、月についての数字及び年についての数字をこの順序に従って、日及び月について2桁のアラビア数字で表示し、年について4桁のアラビア数字で表示し、かつ、日及び月の数字の後にピリオドを付す（例えば2004年3月30日は「30.03.2004」）。他の紀元又は暦を用いる場合には、西暦紀元及びグレゴリー暦による日付を併記する。

様式第23（第62条四回）

答弁書	
特許庁審査官 殿	
1 国際出願の表示	印
2 出願人（代表者）	印
氏名（名稱） あて名 国籍 住所	印
3 代理人	印
氏名 あて名	印
4 あて名の印	印
5 答弁の内容	印
6 添付書類の目録	印

（備考）

- 法第6条の規定による命令に基づき補正をするときは表題を「手続補正書（法第6条の規定による命令に基づく補正）」とし、法第11条の規定により補正をするときは「手続補正書（法第11条の規定による補正）」とし、令第1条第2項の規定による命令に基づき補正をするときは「手続補正書（令第1条第2項の規定による命令に基づく補正）」とし、第27条の3第1項の規定による命令に基づき補正をするときは「手続補正書（第27条の3第1項の規定による補正）」とし、第28条第1項の規定による命令に基づき補正をするときは「手続補正書（第28条第1項の規定による命令に基づく補正）」とし、第50条の3第3項の規定による命令に基づき補正をするときは「第50条の3第3項の規定による命令に基づき補正書」とし、第50条の3第5項の規定による命令に基づき配列表を記載した書面を提出するときは、「第50条の3第5項の規定による命令に基づき配列表を記載した書面の提出書」とし、第50条の3第8項の規定による命令に基づき補正をするときは、「手続補正書（50条の3第8項の規定による命令に基づく補正）」とする。
- 提出先は、特許庁審査官が答弁書の提出又は補正の機会を付与した場合にあっては当該特許庁審査官、その他の場合にあっては特許庁長官とする。
- 「補正の対象」の欄には、「願書のII、出願人の欄」のように補正をする書類名と補正をする箇所を記載する。
- 「補正の内容」の欄には、「別紙のとおり」と記載するとともに補正事項を指摘し、補正のための差替え用紙を別紙として添付する。ただし、補正の結果、用紙の全体が削除されることとなる場合、法第6条、令第1条第2項、第28条第1項若しくは第50条の3第8項の規定による命令に基づく手続の補正の場合又は第27条の3第1項の規定による手続の補正の場合であって、その補正に係る事項についての記載原本への書き換えが容易にできるときは差替え用紙によることを要しない。なお、法第11条の規定による補正のための差替え用紙を添付する場合には、用紙の明りょうさ及び直接複製に影響を及ぼさないことを条件として、先に提出した補正書の写しに補正することにより、差替え用紙とすることができる。

- 請求の範囲について補正をするときは、当該補正に係る請求の範囲を次のように記載した差替え用紙を添付する。
イ 既に請求の範囲を追加するときは、その追加する請求の範囲に補正前の請求の範囲の最後のものに付した番号を「O（追加）」のように記載する。
ロ いずれかの請求の範囲を削除するときは、その削除する請求の範囲に付されている番号を「O（削除）」のように記載する。
ハ 請求の範囲の数を増減せずに補正するときは、その補正された請求の範囲に補正前の請求の範囲の番号と同一の番号を「O（補正後）」のように記載する。
- 6 第50条の3第3項の規定による命令に基づき磁気ディスクを提出するときは、第50条の3第5項の規定による命令に基づき磁気ディスクを提出するときは、次の要領で記載する。
イ 「7 添付書類の目録」の欄に次のように記載する。
6 添付書類の目録 1 配列表に図するコードデータを記載した磁気ディスク

1枚
2 説述書
3 磁気ディスクの記録形式等の情報を記載した書面
1枚

ロ 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。
(文例)

説述書

特許庁審査官 殿
本件に添付した磁気ディスクに記載した基準配列又はアミノ酸配列は、男細胞に記載した基準配列又はアミノ酸配列を忠実にコード化したものであって、内容を変更したものでないことを記載します。

平成 年 月 日

国際出願の表示

発明の名称

特許出願人・代理人
ハ 「磁気ディスクの記録形式等の情報を記載した書面」は、原則として、「出願人氏名（名稱）」、「代理人氏名（名稱）」、「国際出願の表示」、「発明の名称」、「使用した文字コード」、「配列を記載したファイル名」及び「連絡先（電話番号及び担当者の氏名）」の項目を設けて記載することにより作成する。

二 「5 補正の内容」の欄は設けない。
6 補正の内容

7 第50条の3第5項の規定による命令に基づき配列表を記載した書面を提出するときは、「7 添付書類の目録」の欄に次のように記載し、「5 補正の対象」及び「6 補正の内容」の欄は設けない。

6 添付書類の目録 1 配列表を記載した書面

8 用紙は、日本工業規格A4形（横21cm、縦29.7cm）の大きさとし、可読性のある、丈夫な、白色の、滑らかな、光沢のない、耐久性のあるものを底紙にして、折らずに片面のみを用い、用紙には、不要な文字、記号、枠線、けい設等を記載してはならない。

9 用紙には、しわ及び抜け目があつてはならない。

10 余白は、少なくとも用紙の上端、右端及び下端におおのの2cm並びに左端に2.5cmをとるものとし、原則としてその上端及び左端についてはおおのの4cm並びにその右端及び下端についてはおおのの3cmを越えないものとする。この場合において、余白は、完全な空白としておくこととする。ただし、上端の余白の左端であって上端から1.5cm以内に書類記号（願書に記載されている場合に限る。）を付すことができる。

11 手続補正書は、タイプ印又は印刷によるものとし、写真、静電的方法、写真オフセット及びマイクロフィルムによって直接に任意の部類の複製をすることができるよう作成する。

12 手続補正書のすべてに用紙には、アラビア数字により1から始まる連続番号を用紙（余白部分を除く。）の上端又は下端の中央に付す。

13 タイプ印又は印刷による場合において、行の間隔は、少なくとも5mm以上をとる。ただし、備考1.1、1.4においてローマ字を用いるときは1.5mm以上の幅をとる。

14 記載事項は、4号字の大きさの文字（備考1.1、1.4においてローマ字を用いるときは、大文字の大きさが縦0.21cm以上の文字）により、かつ、暗色の追色性のない色であって備考9に定める要件を満たすもので記載する。

15 「国際出願の表示」の欄には、既に特許庁から国際出願番号の通知を受けている場合には、その番号を「PCT/J P O O O O / O O O O O O O 」のように記載し、国際出願番号の通知を受ける前の場合には、その国際出願の提出日を日月年の順に「O O . O O . O O O O 提出の国際出願」のように記載するとともに、書類番号（願書に記載されている場合に限る。）を併せて記載する。

16 「氏名（名稱）」は、自然人においては姓及び名を姓、名の順に記載し、また、法人においてはその名称を記載する。

17 「あて名」は、「日本国、何県、何郡、何村、大字何、字何、何番地、何号」のように詳しく記載するとともに、郵便番号を記載する。

18 氏名若しくは名称又はあて名には、これらの音訳又は英語への翻訳をローマ字を用いて併記する。

19 「国籍」は、出願人又は代表者がその国民である国の国名を記載する。

20 「住所」は、出願人又は代表者がその居住者である国の国名を記載する。

21 国名を記載する場合においては、特許庁長官が指定する国の名称を日本語及び英語により表示する。

22 「代理人」の欄には、その氏名の記載に合わせて、その氏名の前に「弁護士」、「弁理士」又は「法定代理人」のうち該当するものを記載する。

23 代理人によるときは本人の印は不要とし、代理人によらないときは「代理人」の欄を設けるには及ばない。

24 各用紙においては、原則として抹消、訂正、重ね書き及び行間押印を行ってはならない。

25 手続補正書の用紙は、容易に分離し、又はとじ直すことができるよう例えばクリップ等を用いてじてじる。

26 「あて名」は出願人、代表者、代理人又は復代理人各人に1つあて名のみを記載する

27 「復代理人」の欄には、その氏名の記載に合わせて、その氏名の前に「弁護士」又は「弁理士」のうち該当するものを記載する。

28 復代理人によるときは代理人の印は不要とし、復代理人によらないときは「復代理人」の欄を設けるには及ばない。

29 日付は、西暦紀元及びグレゴリー暦により、日についての数字、月についての数字及び年についての数字をこの順序に従って、日及び月について2桁のアラビア数字で表示し、年について4桁のアラビア数字で表示し、かつ、日及び月の数字の後にピリオドを付す（例えば2004年3月30日は「30.03.2004」）。他の紀元又は暦を用いる場合には、西暦紀元及びグレゴリー暦による日付を併記する。

30 「手続補正書」の欄には、その書類記号と提出書類記号を記載する。

31 「手続補正書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

32 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

33 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

34 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

35 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

36 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

37 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

38 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

39 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

40 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

41 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

42 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

43 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

44 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

45 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

46 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

47 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

48 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

49 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

50 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

51 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

52 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

53 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

54 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

55 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

56 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

57 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

58 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

59 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

60 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

61 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

62 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

63 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

64 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

65 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

66 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

67 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

68 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

69 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

70 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

71 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

72 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

73 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

74 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

75 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

76 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

77 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

78 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

79 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

80 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

81 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

82 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

83 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

84 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

85 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

86 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

87 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

88 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

89 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

90 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

91 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

92 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

93 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

94 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

95 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

96 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。

97 「説述書」は、原則として次の文例により作成する。「国際出願の表示」の項目は、備考1.5に従って記載する。